

京都大学	博士(文学)	氏名	牧 角 悦 子
論文題目	聞一多研究 —— 詩と学術 ——		
(論文内容の要旨) 本論は、聞一多の詩と学術について考察したものである。 近代初期を生きた詩人聞一多は、青年期には詩作を通じて、また壮年期には古典研究の分野で、独特の文学世界を構築した。本論では、聞一多という一人の詩人を対象に、その詩作と古典研究に現れる独自性について論じると同時に、その二者が如何様に結び合うのかということについて考察した。 本論は全体を三部に分ける。第一部では詩人の生涯について、第二部では青年期の詩作について、第三部では古典研究について論じた。 第一部・第一章「詩人の軌跡」では、晩年の二年間に劇的に変化した聞一多の文学観と民主運動との関わりを通して、聞一多における詩人としての在り方を、その軌跡から論じた。二十代で詩作をやめ古典研究に向かった聞一多は、最晩年の二年間、激しい民主運動に没入する。学者としての生活を擲って民主の闘士になるのである。それは直接的には一九四三年に田間の詩を読んだことが契機となっていた。同じ対象を扱いながら、全く方向を転換させた聞一多の文学論の変化と、その背景について、そこに聞一多の詩人としての資質が深く関わっていたことを論じた。 第二章「神話と戯曲」では、聞一多と演劇との関わりを論じた。聞一多は生涯にわたって演劇と関わった。修学時代には清華学校におけるサークルにおいて、アメリカ留学時代には折からの演劇ブームの中で上演を含む演劇活動において、そして昆明に疎開後も二度の上演を通して、生涯に渡って演劇と関わり続ける。それはまた学術の分野においては、神話研究、中でも『楚辞』九歌に対する多くの論考としても現れる。第一章に論じた最晩年の思想変化の中でも、この演劇に対する興味だけは変質することとはなかった。その象徴ともいえる九歌の舞台上演計画は、聞一多の殉難によって頓挫したが、原稿「九歌古歌舞劇懸解」として残される。このような生涯にわたる聞一多の演劇活動とその興味の源泉に、神話と演劇をつなぐ、非日常なるものに陶醉する詩的感性と、原始への憧憬があったことを論じた。 第二部・第一章「事実と創造」では、代表詩集『死水』の中から、従来娘への哀悼歌として読まれてきた詩三首を中心に、詩の解釈において作詩当時の詩人の状況やその他の要素を背景あるいは前提として読むことの問題について論じた。「也許」一篇は			

これまで聞一多が娘立瑛の夭折を悼んで詠んだ詩だと解釈されてきた。しかしこの詩は娘の死より前に詠まれているという事実がある。同様に読まれてきた「忘掉她」も、別にアメリカ詩人の恋愛詩から大きな影響を受けている。反対に「我要回來」は、娘への哀悼という前提を置くことで詩への共感が深まる。詩を読む際に、事実を前提にすることの危うさと、しかし事実を含めた様々な背景への理解が、詩の解釈に有効であることを、特に伝統的哀悼歌との関連で論じた。

第二章「紅豆篇の創作背景」は、聞一多の第一詩集である『紅燭』の末尾を飾る「紅豆篇」に詠われる赤裸々な慕情が、聞一多の妻に対するどのような「心境の変化」を反映していたのかについて、主に聞一多の書簡を材料にして考察した。聞一多は最初、望まない結婚と未熟な妻への苛立ちを弟への手紙に激しく吐露している。子供の墮胎まで考えていた。ところがアメリカに留学して半年後、突然訪れた心境の変化によって、五昼夜ぶっとおして妻への思いをこの五十首の連作に結晶させたという。その背後に、郭沫若からの手紙、アメリカ詩壇での評価とならんで、新しく生まれた娘への期待などがあったのではないかと推測した。

第三部・第一章「中国近代の文人と学術」では、歴史が大きく転換した近代という時代において、文に携わる所謂知識人たちが、文学創作と古典研究とに対してどのようなスタンスをとっていたのかについて概論した。まず魯迅については、その古典研究が十分な専門性を持っていたことを、郭沫若については古代社会に対する視点にそれまでにない新しさがあったことを、聞一多についてはその全体像を示し、これら三者が同様に文献学を重視し、それに新しい視点を加えることによって、それぞれ古典研究において功績があったこと、そして同時に、古典への志向はその創作にも影響を持ったであろうことを論じた。

第二章「創作と古典研究をむすぶもの」では、聞一多と『詩経』との関わりを閲歴に沿って考証することで、聞一多が詩の創作を止めて古典研究者になったことの意味を考察した。聞一多はアメリカから帰国後、大学で教鞭をとる傍ら、創作と評論双方において詩壇の中心となるのであるが、そんな詩作の充実期に既に「詩経の性欲観」という『詩経』に関する研究業績を発表している。詩作と古典研究が聞一多にとっては決して矛盾するものではなく、ともに同じ情熱で取り組まれていたことを、十年間の詩経研究の概要と学生からの評価などによって跡付けた。併せて『匡斎尺牘』・「詩新台鴻字説」・『詩経新義』・『詩経通義』に見える『詩経』の新しい読み解きの幾つかを例示した。

第三章「想像の歯車」では、第二章で取り上げた聞一多の詩経関連の業績の中から、

特に「詩經の性欲観」と『匡斎尺牘』を取り上げ、そこに聞一多が設定した古代という時代への視点の斬新さと文学性を論じた。聞一多の詩經理解は、その語彙解釈においては清朝考証学の訓詁考証を受け継ぐものであるが、それに古代という時代が如何なる時代であったのかという民俗学的視点を加えることで、『詩經』の詩篇解釈に新しい文学性と創造性をもたらした。詩を読むという作業は創造の歯車を回す作業だ、と聞一多は言う。併せて、このような聞一多の詩經理解の態度が、詩經研究史の中でどのように位置づけられるのかについて、特に日本の近代的詩經理解との関連で考察した。『詩經』を経典としてではなく文学として読み解こうとする態度は、日本の近代の詩經研究と共通するものである。しかし聞一多の独自性は、古代という時代に対する憧憬の深さと、詩的世界への共感の強さにあり、それは時に想像世界への飛躍を持つものであったことを論じた。

第四章「うたのはじめ」では、昆明に疎開後の聞一多が、古代文学史の講義のために準備した「中国上古文学史講稿」の中から、「歌と詩」の一項を取り上げ、歌と詩の原点に対する聞一多の見解を紹介した。この中で聞一多は感情の発露である「歌」と、記憶し記しとどめるという役割を負わされた「詩」とを区別し、先秦及び漢代の文献から「詩」が本来「志」と同義であり、それは「史」つまり記録の意味を持ったことを例証する。さらにそこから発展して、『詩經』の詩篇はこれらの歌と詩の合流であったと言う見解を示す。聞一多のこの論考には、詩の発生の原点への視点と、それが生成発展する様相を跡付けようとする独特の文学史的視点があることを論じた。

第五章「古代的“詩”の変容」では、前章で取り上げた「歌と詩」を最初の一ページとする聞一多の古代文学史構想の骨格について、遺稿として残された「中国上古文学史」に沿ってその概要を紹介すると同時に、そこから導かれる新しい詩歌観の可能性について論じた。「中国上古文学史」は未完成の遺稿ではありながら、古代という時代に対する聞一多の独自の視点が示される。特に聞一多が古代を、後に歌や詩や歌舞といった形態に発展していく芸術の全ての可能性を含んだ大きな力の原点として捉えていること、そこから総体的な文学史と文化史の構築を目論んでいた事が、この草稿からは読み取れる。そして中でも「詩」という言葉で表されるものの実態が、このような聞一多の視点を通してみることで、新しい様相と変化とを示すのではないかということの問題提起した。

第六章「中国神話学の夜明け」では、聞一多の古代学を近代中国の学術の中で位置づける試みを行った。特に『古史辨』に見られる顧颉剛の詩經解釈と聞一多のそれをとくらべることで、同じく古代に対して新しい視点を持ちながらも両者の古代資料に対する態度には大きな違いがあることを論じた。それは、顧颉剛が神話解釈を通して

各時代の相を見ようとする歴史的視点を持つのに対して、聞一多の場合は神話を生み出した古代の混沌に対する共感を元にした創造と想像を重視するものであったという違いである。あわせて、近代以降、神話そのものを研究の対象とした一連の人々の系譜を概観し、近代学術の中での神話学の背後に新しく自由な精神があったことを論じた。

第七章「聞一多の楚辞学」では、聞一多と『楚辞』との関わりを論じた。聞一多は『楚辞』に対してとりわけ強い思い入れを持っており、その研究方法も多様に変化する。初期の業績においては、従来の王逸的な楚辞理解を否定し、新しい解釈の樹立を目指す。昆明疎開後は、古代と歌謡に対する強い興味のもと、神話研究に関連して楚辞研究にも多くの業績を残す。特に『楚辞校補』は文字考証と文意とを重視した優れた業績として評価が高い。ところが最晩年の二年間になって、聞一多の楚辞研究には社会批判の色調が強くなる。これは第一部第一章において述べた思想と文学観の変化に起因するのであるが、特に屈原を愛国者として熱烈に崇拜し偶像化する態度は、それまでの研究態度とは全く異なる。しかし、『楚辞』という歌謡そのものの持つ本質と詩的有引力の強さを考える時、聞一多の詩的感性がそれと呼応しあったこともまた理解できることを論じた。

第八章「詩と学術」では、聞一多の唐詩に関する論考の一つである「類書と詩」について、その全文を項目に区切って訳出し、併せてこの論考に現れた聞一多の文学観についてその特徴を挙げた。「類書と詩」は、初唐という時代が学術にばかり目を向け文学においては不毛の時代であったことを、類書の編纂との関わりで論じたものである。学術という視点を文学史に持ち込むことで初唐の意味づけがはっきりすること、詩の芸術性と詩的言語の収集とは同一ではありえないことを中心に、初唐における文学不毛の意味を検証したこの論考の意義について論じた。

第九章「初唐における詩人意識の形成」では、聞一多の初唐論「四傑」を中心に、その論考に現れた聞一多の詩人観を探った。「四傑」は、従来一括りに論じられてきた初唐の四傑を、王勃と楊炯、そして盧照鄰と駱賓王の二グループに分け、それぞれの背負った文学史上の役割の相違を論じたものである。この中で聞一多は、駱賓王と盧照鄰は腐敗した宮体詩の形を借りて、そこに新しい気概を吹き込んだ宮体詩の破壊者として、そしてその破壊の上に五言律詩という唐代の新しい詩を確立した王勃と楊炯を五律の建設者として位置づける。その論考にあらわれた聞一多独自の文学観を論じた。また、聞一多がなぜ初唐という時代に注目したのかということに関連して、初唐という時代の持った特別な意味について、文人に対する批判的評価の中から考察した。初唐という時代は、北朝系の関隴集団が政治の実験を握ってはいたものの、没落した

六朝以来の旧家名族が再びその文才によって地位を高めつつあった時代である。対立する二つの政治勢力のせめぎあいの中で、文に対する意識も変化する。文学と詩、そして詩人の存在が新しい認識を獲得する時代として、初唐は聞一多の興味を引いたのではないかということを論じた。

第十章「聞一多の学術」では、聞一多の学術全体をトータルに見たときの特性について、それを研究対象と研究方法に分けて論じた。まず唐詩に関しては杜甫に対する思いの深さ、そして初唐という時代への注目が特徴としてある。詩経研究に関しては、本文の校定、背景設定に加えて、それを文学的に展開することが大きな特徴である。楚辞研究に関しては、本文校勘や字句の訓詁以外に、九歌と演劇との関連、屈原についての考察に大きな特徴が現れる。『詩経』と『楚辞』に関しては、ともに物を生む原始の混沌に対する深い共感と憧憬を背景にもつことが、その最も大きな特徴だといえよう。これら対象別の研究以外に、対象に向かう方法論にも聞一多独自のものがある。まず文字の校勘訓詁に関しては清朝考証学の伝統を受け継いだものであること、ただそれは清華学派の影響を受けた、主観への傾斜を容認するものでもあった。また、文学史・文化史的な視点を持ったことも聞一多の学術の大きな特徴である。それは選り取られた一つの方法論であったのだけでも、特に晩年の文化論は現実批判に傾いていく嫌いがある。しかし、聞一多の古典研究の最も大きな特徴は、その詩と詩人への認識の中に現れる。聞一多の古典研究は常に、詩とは何か、詩人とは何かという問いが根底に据えられる。その詩と文学の本質に迫ろうとする態度の中にある文学性こそが聞一多の学術の最大の特徴だと言えるのである。

以上、聞一多の詩と学術を通して、詩を対象にした学問においてどのようなあり方が可能かという文学研究の方法を模索した。聞一多の学術にはとても硬質な文献考証があると同時に、研究対象の文学作品に対する強い共感と深い思い入れがある。主観と客観という一見相反するように思える二つの態度が、時に矛盾しながらも時に調和を見せる聞一多の古典研究は、詩人的感性の結晶であると同時に、詩を対象に学問することの多様な可能性を示唆するものでもある。

また、聞一多の生きた近代初期には、学術の分野で非常に質の高い優れた業績が多く世に問われる。古典の再評価とも言うべき近代の学術の中で、聞一多の古典研究を位置づけることもまた、本論の目的の一つである。

(論文審査の結果の要旨)

20世紀に入って、中国の社会全体が大きな激動を迎えた時期、学术界にも空前の変化が生じた。経学を中心とした伝統的な学問から、西欧近代の流入を機に近代的な学への模索が沸き起こるのである。変動の渦のなかで幾多の個性が輝くが、本論はその一人である聞一多を取り上げた研究である。

聞一多(1899—1946)は中国では没後ほどなく四冊本の全集が刊行され、近年改めて十二冊本の全集が編纂され、さらには長大な『聞一多年譜長編』が編まれるなど、盛んに顕彰されているが、日本ではその研究は必ずしも活発でない。イデオロギー臭の少ない聞一多は日本人になじみやすい存在であるにもかかわらず活発でない理由の一つは、後述するごとく、あまりに多方面にわたる総体が容易に掌握しきれないためであろうか。論者は早くから聞一多に深い関心を寄せ、「聞一多学会」を立ち上げ主催するなど、日本における聞一多研究を牽引してきたが、本論はその集大成というべきものである。

本論の価値の一つは、多面的な聞一多の全体を対象としたこと、且つその全体を貫く聞一多の本質を明らかにしようと努めたことである。清華大学でアメリカ式の教育を受けたのち、アメリカに渡って美術、演劇、文学を学び、帰国後はいくつかの大学で中国古典文学を講じ、最後は国民党の手によって凶弾に倒れるというその人生自体が起伏に富むが、彼の関わる領域も多岐に渡り、古典学者の枠には収まらない。留学直後は「新詩」——西欧の影響を受けた、白話による詩の詩人として、まず世に知られたのである。詩作を封印したのちに没頭した古典学においても、『詩経』・『楚辞』から唐詩に及ぶ広い範囲に足跡をのこし、また研究方法においても精緻な考証を極める杜甫の年譜、唐詩大系がある一方、『詩経』を性の謳歌として捉えるなど、新しい時代の先端を走る研究もある。

本論はまず詩人聞一多の「新詩」の分析から着手する。詩の分析は困難なものであるが、論者は代表的な作品を緻密に読み解いていくことによって彼の詩の魅力を開示していく。それを通して聞一多が詩人として卓越していたことは十分に説得されるものである。

一人の文学者が創作と研究の双方に手を染めることは中国では希ではなく、論者が比較に取り上げる魯迅、郭沫若もそうであるが、ただ魯迅にせよ郭沫若にせよ、彼らの創作と研究とがどのような関係にあるのかについては十分な理解がいまだに得られていない。論者は聞一多の場合、のちにみずから詩作を断ち切ったにしても、詩人としての資質が生涯を貫いて彼の根底にあると論じる。「歌と詩」の発生を論じた文にも、『詩経』・『楚辞』研究にしても、聞一多の詩人としての感性が鋭い直感として斬新な発想を可能にしたことを、聞一多の論考を取り上げて具体的に解き明かしていく。もちろん聞一多の論が単なる突飛な思いつきに終わらなかったのは、文献の考証あつてのことであるが、その発端に論者は詩人の資質を認めるのである。

聞一多の古代文学研究は文化人類学、民俗学などの視点によって新たな知見が得られたことを評価しつつも、論者自身が『詩経』・『楚辞』の研究者であるために、今日では広く認められている呪術的要素への配慮が欠如していることをも併せて指摘する。また唐詩研究についての論述では、聞一多に触発されて論者自身の問題提起とその解決の論を繰り広げるなど、本論は聞一多に対するオマージュに終始するものではなく、主体的な観点を保持しつつ聞一多を論じる態度に貫かれている。

唐詩研究においてとりわけ顕著なのは、聞一多が文学史的な視点を基底に据えていることであると、論者は力説する。作者個人にすべてを帰する、今日もいまだに通行している研究態度を聞一多はとっくに乗り越えていたのである。

問題は最後の二、三年の民主化運動に没頭する聞一多をいかに理解するかということである。魯迅・郭沫若に比べて政治性が希薄であり、詩人的気質で貫かれているかに見える聞一多の生涯の最後になぜこのような政治的時期が加わるのか、論者は外的要因と内的発動から解き明かそうとするが、その説明は十分に説得力を持たないのではないか。或いはそうした謎がのこされるところに、聞一多の複雑さと魅力が存するとも言えようが、この箇所論述に関しては更なる探求を待ちたい。

とはいえ、多面的な聞一多の総体を一つの統一体として可能な限り追求した本論は聞一多研究の貴重な成果であることは疑いえない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2010年5月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。